

「図解 食道静脈瘤硬化療法」

東京大学教授 出 月 康 夫 編集
筑波大学講師 高 瀬 靖 広

新潟大学教授

市 田 文 弘

この度、食道静脈瘤に対する食道離断術の伝統をもつ東京大学第2外科の出月康夫教授と、食道静脈瘤の硬化療法ではわが国の草分け的存在である筑波大学外科の高瀬靖広講師との編集による「図解 食道静脈瘤硬化療法」が医学書院から上梓された。その時期もよく、本年1月21, 22日の2日間にわたって、東京で編集者の1人である出月教授を会長として、Tokyo Symposium on the Treatment of Esophageal Varicesが開催された。それにはアメリカのEmory University Hospitalの外科のWarren教授やMichigan University Hospitalの外科のEchhauser教授をはじめ欧米の第1線の外科医と共に、わが国のこの方面を専門にしている外科医、内科医が集まってこのsymposiumが行われ、食道静脈瘤の病態や治療に大きな関心と呼んだ。

そもそも食道静脈瘤に対する手術的治療法としては、食道静脈瘤直達

手術(食道離断術、胃上部切除術、Hassab手術など)であるが、一部では選択的シャント手術(遠位脾腎静脈吻合術)が行われている。一方、保存的治療法としては内視鏡的硬化療法が急速に普及し、内視鏡医にとって出血時緊急治療の対象になっている。また一部では静脈瘤塞栓術(経皮経肝的、経上腸間膜静脈的)も補助的に行われている。緊急止血法としてはバルーンタンポナーデ法と薬物療法(バズプレッシン、イソプロテレノールなど)が普及している。

食道静脈瘤の治療法としては、これら数種類の治療法の中から患者の病態に応じて最適な方法を選択する必要がある。それらのうち最近急速に普及し、外科医、内科医を問わず施行されているのが内視鏡的食道静脈瘤硬化療法である。この内視鏡的硬化療法について編集者らも序文で述べているように、最も標準的な実施手技、現在広く使われている硬化剤の薬理作用、合併症、治療成績な

どについて詳しく述べられている。とりわけ、適応患者の選択と正しい実施手技に熟練することは合併症の発生を未然に防ぎ、治療成績を向上させるためにも不可欠であるのが当然で、その意味もあって、実施方法の要点を図示し、目に訴えて理解しやすいように努力が払われている。本書の内容は、内視鏡的硬化療法の歴史に始まり、食道静脈瘤の病態について解説し、硬化療法の適応、硬化剤の現況について述べられている。また食道静脈瘤硬化療法の実際、特にテクニックと手技上のコツについては本書の目的でもあるので、図解して詳述されている。またわれわれ内科医に関心が深い出血時の緊急止血法について、“私はこうしている”と題して3人の外科医の意見が述べられているのが参考になる。また最後には食道静脈瘤硬化療法の問題点と展望について述べられている。そのうち、日常診療に際していつも問題になるのは、本療法の成績判定の基準や胃静脈瘤に対する処置などである。

本書は内視鏡的硬化療法をこれから始める人達はもちろん、現在本療法を行っている人達の反省も含めて必読の書である。

B5判 152頁 図69 写真57
カラー写真12 色図14 1988
¥6,500 円300 医学書院 刊